In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	農業における生産主義の衰退と隆盛?：対蹠地の観点
Author	ロッシュ, マイケル / アージェント, ニール / 中窪, 啓介 [訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 21 巻, p.81-93.
Issue Date	2018
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	Progress in Human Geography39(5), pp.621-635, 2015. / Copyright-2015 by The Authors：Reprinted by Permission of SAGE Publications, Ltd.
DOI	10.24544/ocu.20190401-027

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・社会・地理思想 21 号，81-93 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

農業における生産主義の衰退と隆盛？　対蹠地の観点

マイケル・ロッシュ *、ニール・アージェント **
（中窪啓介 *** 訳）

Michael ROCHE, Neil ARGENT
The fall and Rise of Agricultural Productivism? An Antipodean Viewpoint,
Progress in Human Geography 39(5), pp. 621-635, 2015.
Copyright - 2015 by The Authors
Reprinted by Permission of SAGE Publications, Ltd.

要旨：本研究は、2000 年代初頭に盛んに論争された生産主義からポスト生産主義への移行を、対蹠地の観点から再検討する。対蹠地は、この議論が農村変化を理論化するものとして、さまざまな形で熱心に取り入れられるとともに激しく争われた場所である。生産主義とポスト生産主義という用語法、特に前者のさまざまな種類が現れた背景について論じる。多面的機能主義が支持されているものの、生産主義は特に萌芽的な形態（保護主義的生産主義、競争的生産主義、スーパー生産主義）で存続していることを指摘する。筆者らは、多面的機能の継続性ある研究アジェンダを立ち上げるために、用語法の改定を加えた、真にマルチスケールな概念図式を開発しなければならないと主張する。

キーワード：オーストラリア、ハイパー生産主義、多面的機能主義、ニュージーランド、ポスト生産主義、生産主義、生産主義イデオロギー、スーパー生産主義

Ⅰ　導入

McDonaghの報告（2013: 716）は、「生産主義という形態での近代化から、ポスト生産主義および、あるいは多面的機能の田園地域と呼ばれるものへの」、「いわゆる田園地域におけるパラダイムの移行」に関するものであるが、その淡々とした記述は、10年前にポスト生産主義が集めた熱い注目にはそぐわない感じである。彼は、「ポスト生産主義社会での」小規模農場の持続不可能性について論じ、一部の読者にとっては規範的なEUの観点である「より多面的な機能を視野に入れた展望」（McDonagh 2013: 716-17）を支持している。また先のWoodsによるこのサブディシプリンのレビュー（2009, 2010, 2012）は、イギリスの地理学におけるルーラリティ、学際的でパフォーマティブな農村地理学、農村の将来に焦点を当てるが、同時に、論争概念である食料主権との関連で、「（スーパー）生産主義的な農業技術の強化」（Woods, 2012: 127）にも言及している。農村地理学の文献を再読すると、その片隅で生産主義とポスト生産主義は存続してきたことがわかる。Dibden et al.（2009）も「ハイパー生産主義」について論じ、他方、Burton and Wilson（2012）は複数の「ネオ生産主義」を識別した。本研究は対蹠地から生産主義とポスト生産主義の再評価を提起するが、そのことを正当とする根拠は３点ある。第１に、オーストラリアはヨーロッパ以上に、生産主義からポスト生産主義への移行（以下、PPT）にとって初期の「試験場」であった（Holmes, 2002）。加えて、PPTに関する有力な論文を発表したWilsonは、オーストラリアのランドケア運動の研究を通じて（Wilson, 2004）、またニュージーランドにおける農業と林業の接触域を調査して（Wilson and Memon, 2005）、自身の思考を拡張した。第２に、ニュージーランドは農業の生産主義の事例と、PPTの主要な目印と考えられる消費主義的、環境保護主義的な景観の事例を提供したものの、現地の農村研究者は農村変化に対する他のアプローチを支持した（たとえばPanelli et al., 2003）。一方、Wilson and Rigg（2003）は、生産主義とポスト生産主義はグローバルサウスにおいて概念として何らかの魅力があるか、という重要な問題に取り組んだ。彼らの結論は、完全に一般化可能なカテゴリーとしてのポスト生産主義に対する熱意を鈍らせた。ただし、こうした議論には、オーストラリアを単純にグローバルノースの一部として扱う傾向がある。これはオーストラリアとニュージーランドが有する、帝国の農場（Denoon, 1983）としての過去を見落としている。それゆえ、この地域での生産主義やポスト生産主義が、イギリスの農業地理学が示すものに必ずや非常に近しいだろうと考える理由はない。第３に、

*　マッシー大学（ニュージーランド）
**　ニューイングランド大学（オーストラリア）
***　関西学院大学大学院文学研究科研究科研究員

Wilson（2001:94）が「農業の多面的機能レジーム」として再概念化したポスト生産主義は、オーストラリアの地理学者と共同してこの研究の道筋を先に進めてきたHolmes（2002: 381）が、「農業[1]の多面的機能占有occupance」としてさらに精緻なものにした。平行した歩みの中で、多面的機能はイギリスの地理学者の優先使用語となった（Wilson, 2008）。以上のように、PPTの論争において、オーストラリアはあまり顧みられなかった場所であるが、実際にはかなり中心的な地位を占めたのである。

もっとも、より広い目で見ると、学問の仕事において不可欠だが過小評価されるかもしれない側面には、堅固な分類学の開発が含まれる。つまり私たちの変化する現実を記述できて、もしかすると説明する手立てになるかもしれない、カテゴリーと付随用語の開発である。もちろんそれは論争を引き起こす作業である。「名付け」の変更は多くの場合、当然ながら、その変更に関する大小さまざまな「事実」をめぐって論戦と反論を招く。しかし、それは私たちの仕事の決定的に重要な部分である。なぜならそれは、私たちと、私たちが関与する世界の人々（一般の人々はもちろん、願わくば政策立案者）が、変化の主要な原動力と影響について、さまざまな地理的、時間的スケールで理解することを助けるからである。私たちの知的労働は、より幅広い社会の人々が、特殊なものの中に一般的なものを見いだすことやその逆のことを支援するだろう。したがって、予期される将来や、多少なりともあり得る将来を推測するのに不可欠な助けとなる（Harvey, 1984を参照）。農村地理学は常に理論的な観念の培養器やるつぼと目されてきたわけではないが、1990年代の生産主義やポスト生産主義の議論は、このサブディシプリンの知的発展と人文地理学へのより幅広い関わりという点で重要な段階であった。アメニティマイグレーション、「新しい」農村ガバナンス、オルタナティブフードネットワークなどと関連するような、重要で実りの多い研究プログラムは、まず間違いなくこの議論から生まれたのである。もっとも、振り返ってみて不可解なのは、限られた少数の場所の数少ない研究者のみが、この議論や関連した研究の道筋を率いたことである。

筆者らはこのなお多くの研究群をレビューする中で、鍵となる用語と概念をいくらか改良する時期に至ったと感じずにはいられない。単一機能、多面的機能、ハイパー生産主義、スーパー生産主義、ネオ生産主義といった、現在よく見られるルーズな用語の使用について、筆者らはいよいよ危惧している。私たち相互の意思疎通、私たちが影響をおよぼそうとする政策組織やより幅広い人々との意思疎通を、もっと明確で正確にするためには、発見的フレームワークの開発が必要かもしれない。このフレームワークは、現代の農業変化に関係する鍵となる概念と用語を設定するとともに、極めて重要なことにはそれらの互いの相対関係を明確に定めるものである。この開発が本研究の主要な目的の一つである。

II　オーストラリアにおける生産主義とポスト生産主義

まず間違いなく、Ilbery and Bowler（1998）はPPTという用語を体系的に設定した最初の研究者である。以前から多くの農村地理学者と農村社会学者が、戦後のイギリスやヨーロッパにおける農業の政治経済を、類似した見方で再解釈しはじめていたのであるが（Ward, 1993; Shucksmith, 1993; Evans and Morris, 1997; Potter, 1997）。Wilson（2001）は、オーストラリアの地理学者が賛否両論をともなってPPTを熟考するきっかけを与えた。Smailes（2002: 80）は、「『ポスト生産主義』という用語は、オーストラリア農村の大部分について誤解を招きかねない含意を有する」と確信していた。Argent（2002）とHolmes（2002）はWilson（2001）を基点として、オーストラリアにおける生産主義からポスト生産主義への移行について対照的な評価を提示した。Argent（2002: 98）はその「内部の論理」を問いただしたが、Holmes（2002）はこのモデルをオーストラリアの状況に適応させた。

Argentが認めるには、オーストラリアの農業では1945年から1973年は生産主義段階と、それ以後はポスト生産主義段階と比較的きっちりとした適合性があったものの、こうしたカテゴリーはオーストラリアの文脈において説明上の有用性をほとんど持たなかった。

> 農業の生産主義というかつての支配的秩序が有していた物質的、象徴的な特徴が、（農村の牧歌的情景から導き出された経済的な回帰主義、環境保護主義、景観の美意識に基礎を置く）新しいパラダイムに圧倒されつつあるという所見は、農村地域やそこでの慣行がいかに変化しているかについて、実際のところ何か新しいことを明らかにするだろうか？（Argent, 2002: 106）

オーストラリアでポスト生産主義が退けられた理由は、それが二分法のメタ物語として、歴史的な事象と過程を「無批判にふるいにかけて」「二分法を構成する各カテゴリーに押し込み」、そうすることでその「独自の仮説」を擁護する点にあった（Argent, 2002: 111）。さらにそれはマクロスケールの概念として、特に農場レベルでは、「生産主義とポスト生産主義とのいかなる区分にもきっちり適合しない」（Argent, 2002: 111）ローカルスケールの帰結と過程を説明しない。このため、イギリスの地理学者によるポスト生産主義の主張に対して、オーストラリアとニュージーランドの地理学者は強く反発することとなった。当地の地理学者は、「財政的に圧迫された農家が生き残りのために高い生産性を達成しようと努めることで、生産主義の強い支配が継続する証をそこら中で目にしている」（Argent, 2002: 111）のである。

同時に、Holmes（2002）はPPTについて、オーストラリアの放牧地で「そのモデルを検証した」後に、別の結論に到達した。彼はPPTの基本的な概念を受け入れたが、この研究手法がとられたことは、イギリスとオーストラリアとで経験がかなり相違する領域があるのを彼が認めていることも意味した。それはたとえば、「ポスト生産主義の関心の構成」、移行のローカルな原動力、さまざまなPPT地域の地図作成といった領域である（Holmes, 2002: 372）。彼はこうしたオーストラリアにとって重要な各点を詳述する中で、「主要な新興放牧地の関心は市場経済の外にあり」（Holmes, 2002: 372）、「オーストラリアの放牧地［は］、位置由来の価値を追求する者に不動産としての魅力をほとんど提供しなかった」（Holmes, 2002: 375）と述べた。実際、彼は内陸のアウトバックについて、「農村の牧歌的情景を求める者から好ましくないものといまだに考えられている」と記述した（Holmes, 2002: 375）。それにもかかわらず、PPTは「西欧やアメリカ西部よりもずっと地域が広大で同質的であるオーストラリアの放牧地ではっきりと輪郭が図示され、暫定的なポスト生産主義の地域区分を現実的な目標にしている」（Holmes, 2002: 376）。

Holmesの考えによると、放牧地の知見は「ポスト生産主義への移行という概念の妥当性と有益性を強力に支持し」、さらに「そうした移行が西欧一般よりもオーストラリアの放牧地で容易に認められる」ことも提起した（Holmes, 2002: 379）。Holmes（2002：380）がWilsonの主張する移行の７つの次元に見出した主な「不備」は、「存在感を増すアメニティの価値を、彼の言うイデオロギーやアクターの次元に対して、別個の次元として同定しないで組み入れたこと」にあった。HolmesはPPTに強い関心を持っていたが、この用語法を採用せず、そのかわりにWilsonの「農業の多面的機能レジーム」にならい、さらにこれに修正を加えて、「農村の多面的機能占有」が現れつつある時代における「農業の生産主義レジーム」とした（Holmes, 2002: 381）。

Wilson（2004: 462）はPPTよりも農業の多面的機能レジームを選んで、やはりこの問題を探求し続けた。彼はアクターと、「ポスト生産主義レジームのガバナンス」と彼が呼ぶものへ注意を移して、オーストラリアのランドケア運動を研究した。その際に、ローカルな自律的アクターを多面的機能に結びつけ、かつ国家主導のアクションを生産主義に結びつける過度の単純化に留意するとともに、他方でArgentによる、ポスト生産主義に対する対蹠地からのさらに踏み込んだ批判に気を配った。彼の結論によれば、ランドケア運動は「『ポスト生産主義の農村ガバナンス』に関する私たちの考えに適合するであろう特定の特徴をもっぱら描いている」（Wilson, 2004: 479）。さらにこのことから、ポスト生産主義の農村ガバナンスのレジームにおける「個々の構成要素」は、かなり「異なる速度で変化するだろう」と彼は考えた（Wilson, 2004: 481）。オーストラリア農村は、Holmes（2002）が「実験室」に極めて適していると述べたが、以上のように「実験室」となったことで、農村地理学における国際的なPPT論争に直接組み込まれたのである。

2002年以降の生産主義とPPTに関するオーストラリアの地理学の著作は、Holmesによる度々の労作を通しておおむねたどることができる（Holmes, 2008, 2010a, 2010b, 2012）。彼はその概念を「農村の多面的機能占有」という観点から、さまざまなスケールとロケーションで「テスト」しようとした。Wilson（2007）に影響を与えた、アジェンダを設定するレビュー論文（Holmes, 2006）は、こうした著作を補った。また新自由主義とWTOについて記したオーストラリアの他の地理学者も、ヨーロッパとオーストラリアとで異なる多面的機能の意味に照らして生産主義を精査した（Cocklin et al., 2006）。Argent（2011）は農村ガバナンスにおけるPPTについてさらに論評し、今ではそれは別の理論構築の枠で捉えられるべきであると提起した。

Holmesは、生産・消費・保全という３つの推力の相関的な力によって概念が作られる、農村の７つの占有のモデルを識別した（Holmes, 2006, 2008,

2010a)。農村変化の理解という観点からHolmes(2006)が主張するには、複数のスケールにおいて現代の農村空間を形成する、経済的、社会的、環境的な推力の間のバランスを理解するために、PPTは不完全ながらも唯一利用可能な概念化である。彼はPPTの概念を、「多くの異なる成分を取り入れうるような、寛容で広々とした貯蔵庫であるという魅力」を有するものとして支持する一方、PPTの概念は「アメリカ、カナダ、ニュージーランドと同じように」「オーストラリアにおいても、『主流派』の農村研究者の間で注目を集めることに失敗してきた」点を認めた（Holmes, 2006: 143)。PPTに対するこうした「オーストラリアの無関心」について考えをめぐらせると、彼の２点の説明（オーストラリア農村においてこの概念は「診断上の有用性がほとんどない」ものとみなされた点、イギリスと著しく異なる他の「研究アジェンダ」が国内のシーンを形成していた点）は、同じくニュージーランドの状況にもよく当てはまる(Holmes, 2006: 143)。

Holmes（2006: 143）が主張するには、多面的機能はオーストラリアや「より一般的には豊かな社会における」農村変化を理解するための包括的な概念である。彼はポスト生産主義よりも多面的機能が、オーストラリアの「農村変化を進める中心的な原動力」であるとみなした（Holmes, 2006: 143)。これにしたがって彼は、焦点を農業から、農村資源を幅広く利用するあらゆる形態へ移すことについて論じた。彼の用語法のさらなる利点は、それが正確、簡潔、一般化可能であり、「『ポスト』という接頭語に付随する歴史主義的な視野の狭さを逃れている」点にあると彼は考えた（Holmes, 2006: 145)。Holmes（2008, 2010a, 2010b, 2012）は、現実の地理的空間における様式間の移行に焦点を当てながら、多面的機能をさまざまなスケールで探求し続けてきた。ポスト生産主義は除外されて、さらに改善された概念が支持されてきたのである。そのことは、彼が「農村の移行を、単一機能の生産主義から離れて多面的機能主義の価値へ向かうものとして」記述したことに表れている(Holmes, 2010a: 343-4)。「単一機能主義」（Holmes, 2006: 145）の対蹠地における起源については後で振り返る。

Dibden et al.（2009）は人類学的アプローチに依拠して介入し、農産物貿易の自由化とWTOの文脈において、生産主義と多面的機能の軌跡をEUとオーストラリアとで対比させた。彼女らはEUの多面的機能を「保護主義的な行為」と言い表し、オーストラリアの「競争的生産主義」と対比させた(Dibden et al., 2009: 302)。その説明によると、競争的生産主義と多面的機能ははっきり相違する言説上のポジションを表しているが、しかし実際には、各々は社会と環境の面で保護主義(もしくは「福祉国家主義」)と新自由主義の「発現の契機」を有する。そして、新自由主義はWTOレベルにおいて「抵抗不可能なイデオロギー」ではなく、むしろ「交渉可能な言説」であるという（Dibden et al., 2009: 300)。また、この議論でより中心をなすものとして、Dibden et al. は、EUの大量に補助金が投入された保護主義の農業と、彼女らが「競争的生産主義」の条件と呼ぶもののもとで営まれる、オーストラリアの「補助金を受けていない非常に生産性の高い農業」とを対比させた（Dibden, et al., 2009: 300)。

さらに、Rosin（2013）を先取りしてDibden et al.,（2009: 302）が述べるには、オーストラリアの農場主の一部は農作業を集約化し、土地を整理統合し、より洗練された経営管理実務の利用を通じて「非効率な」農場主を追い出すことによって、貿易自由化に適応してきた。その帰結は、「ハイパー生産主義や競争的生産主義」であったという（Dibden, et al., 2009: 302)。彼女らは、二つの用語の関係性や、そうした用語の地理的な状況依存性について、詳しく性質を論じていないが、それらすべてはさらなる研究のための道筋であるように思われる。多面的機能主義をめぐる議論のもう一方は、Fielke and Bardsley（2013: 759)が提起した。彼らが規範的な主張を唱えて支持する政策は、オーストラリアにおいて農場主のファーマーズマーケットへのアクセスを改善し、それによって農場主が「生産主義パラダイムという支配的な新自由主義の形態」のもとで生計を維持しようとする苦闘から逃れることを可能にするものである。また、ここで妥当なものとして、Fielke and Bardsley（2013）は、ポスト生産主義レジームよりも「多面的機能」の農業を好む。それが経済的、社会的、環境的な要素の混成を取り入れるからである。社会学者のLawrence et al.（2013: 37）が利用したのは「競争的生産主義」という用語であり、これはオーストラリアの新自由主義下で展開していて、特に気候変動と関係するものであるという。もっとも、彼らの分析のほとんどはなおArgent（2002）に効果的に依拠しており、とりわけ「環境面で害のない」PPTの将来像を拒否する場合にはそうである。

10年が経過して、今では農村ガバナンスがオーストラリアにPPTを位置づける新しい手立てを与えている。

ポスト生産主義への移行という（多くの点でフォーディズムからポストフォーディズムへの移行に相当する農村地理学の）考えは、今ではよく知られ、かなり徹底的に批判されてきた。（最初にPPTが考え出された背景であるEUに対して調整をほどこすアンチテーゼである）対蹠地では・・・PPTの二分法の構造とまでは言わないが一般概念が、オーストラリアの条件に適用されてきた（Argent, 2011: 185）。

おそらくこの点においてこそ、分析の焦点が何であるかをいくらか明確化しなければならない。焦点は、農業のシステムと景観であろうか？　もしくは、たとえばBarr（2005）の社会的景観の観念のような、疑似機能的な統一体としての農村の町とコミュニティを含む幅広い田園地域であろうか？　この点については後で再び取り上げる。

III　ニュージーランドにおける生産主義とポスト生産主義

ニュージーランドの地理学者は生産主義、ポスト生産主義、多面的機能の論争を承知していたが、それらを自分たちの分析に完全に導入することは決してなかった。たとえばWillis（2001: 62）は、「このモデルの観点からニュージーランドの農業を手短に検討するのは興味深い」と述べ、さらに続けて論じるには、「一方でニュージーランドの農場は、海外の農場と同様に、こうしたポスト生産主義の趨勢に影響を受けているが・・・他方でニュージーランドの農業は、酪農業の趨勢が示すように、ほとんどの意味で依然として生産主義のままである」。生産主義とポスト生産主義よりも規制緩和と持続可能性が、Smith and Montgomery（2003）の農業再編に関する議論を下支えした。このことは北島における高原地域の農場主に関する地域事例研究にも当てはまり、同研究は増大する国内の持続可能性の文献に影響を受けた（Smith, et al., 2007）。ただし、彼らは「持続可能性への移行」について論じる中で、社会的、経済的、環境的な「持続可能性の構成要素」を同定する国際的な文献を正当に評価した。彼らが述べるには、「ポスト生産主義の農業に見られるように、美学と価値に関連した問題は、社会と環境の両方の持続可能性をめぐる問題と結びついている」（Smith et al., 2007: 38）。

Willis（2003）は、ニュージーランドの農業において進化的変化を同定した。そうした中には、農場規模の増大、農村の過疎化、小農村の衰退、農村工業の集中、農村の文化・スポーツ施設の集中があった。「国際的な文献の中で、ポスト農業の農村コミュニティやポスト生産主義の経済などは、新しい文化地理学のいくつかの用語に適合する」（Willis, 2003: 64）。彼はこの進化的変化を、1980年代半ばの規制緩和的な変化に起因する革命的変化と対比させた。そして、この革命的変化を南島のブラーの例を用いて例証し、南タラナキ（北島の酪農場の中心地）の進化的変化の事例と対比した。彼の評価によると、「ブラーの鉱業と伝統的な林業の衰退はこのモデルに適合しており、将来の経済的な頼みの綱をツーリズムや他のポスト生産主義的なサービスに見出す傾向も同様である」。対照的に南タラナキについて彼は、大規模家族農場が残存し企業農業は存在しない「再編された集中の形態」を認めたが、農村の「文化活動も集中してきた」（Willis, 2003: 76）。

他のニュージーランドの地理学的研究は、農村のテーマの探求を、農場、ローカリティ、リージョナルスケールで、さまざまな理論立てを用いて行った。たとえばJohnsen（2004）は、1980年代における農場部門の「再編」の余波を精査する中で、家族農業と多面的活動に関する考えを展開した。対照的に、Conradson and Pawson（2009）は地域スケールの視点に立ち、南島西岸を対象にして、金にはじまり石炭、原生林、そしてより近年のツーリズムにいたる、さまざまな天然資源ブームの場面に焦点を当てた。彼らが述べるには、ツーリズムは「多くのポスト工業、ポスト生産主義の環境において経済発展の潜在的資源と考えられている」（Conradson and Pawson, 2009: 83）。彼らの重要な議論が取り組むのは、新鉱物の開発、酪農業の拡大、対立する生産林と保全林、ツーリズムであり、それらは多面的機能とは言えなくとも、ある水準ではポスト生産主義の要素を含んでいるようである。しかしながら、新自由主義下における、「地域の周縁性」や、ローカルな開発の責務を地域に委譲することの複雑性を強調するのは、彼らが望ましいと思うアプローチではなかった（Conradson and Pawson, 2009: 78）。

ニュージーランドのファーマーズマーケットの研究者も、「ポスト生産主義の農村景観」（すなわちローカルフードの農村景観）に自らの研究を位置づけることを避け、農業コミュニティのつながりの動態を研究してきた（Chalmers et al., 2009: 321）。この研究者らはファーマーズマーケットを、ポスト生産主義の田園地域に必然的に埋め込まれたものとはみなさなかった。Argent（2002）と同様に筆者らが考えるに

は、確かに、ポスト生産主義のルーラリティという主にヨーロッパの見解と、対蹠地の景観のほとんどで大規模な生産主義の農場が卓越し続けていることの間に、適合性は少ない。ゆえに、筆者らはファーマーズマーケットを、いまだ伝統的な生産主義の特徴が支配する景観の内で、多様性が増している興味深い兆候と考えている（Chalmers et al., 2009: 322）。むしろ研究者らは、農業変化と農村変化との相互関係に対するもっと幅広いアプローチに訴えており、そのアプローチの一部は北アメリカの文脈から移入されたものである（Joseph et al., 2001）。

反対にJayは、人類学的アプローチに依拠しながらポスト生産主義に直接取り組み、ニュージーランドの乳業においてもう一つの伝統的な中心地であるワイカトを地域設定に据えた。そこで彼女は「生産主義」を、農業の集約的な拡張主義の形態というイギリスの伝統的な農業地理学の趣旨で用いており、それは国家支援に促されて生産量と生産性の増大を志向するものである（Jay, 2007: 267）。彼女はイギリスとオーストラリアの文献を詳しく検討し、特にWilson（2001）、Argent（2002）、Holmes（2002）に依拠して、乾燥放牧地に対するHolmesの焦点を、南オーストラリア、ビクトリア、ニューサウスウェールズといった比較的湿潤な地区に対するArgentの関心と区別した。Jayが述べるには、「ニュージーランドの［生産主義の］形態は、イギリスで記述されるものと細部において異なるかもしれないが、ニュージーランドの酪農経営と乳業の主要な要素は、生産拡大と経済効率に重点を置いていることにあり」（Jay, 2007: 268）、「要するにニュージーランドの酪農業は、ほとんどの欧米工業国における生産主義の酪農経営の特徴を示している」（Jay, 2007: 269）。次に彼女の注目は、酪農業の拡張と農場主の経営慣行・哲学の、環境への影響に向けられた。彼女は別の文献で、「ニュージーランドの酪農経営における生産主義の慣行」（Jay, 2005: 15）に言及しただけでなく、一部の農場での残存林の保全など、農場主の意思決定における非－経済的な動機の役割も認めた。こうした反応はより集約的な生産主義への抵抗とみなされるかもしれないが、彼女はどちらの反応についても、多面的機能のしるしを土地利用におけるPPTの何らかの形態とは決して考えなかった。彼女は生産主義やポスト生産主義に対して、ニュージーランドでのその有用性という点で、「限定付きのイエス」（Jay, 2003: 162）だけを与えた。注意書きによると、生産主義はかなり適合するが、ポスト生産主義は「より問題含みである。なぜなら、それはニュージーランドの農業に生じている変化を正確に描き損ねており、また社会変化と農業変化をひとまとめにしているからである」（Jay, 2003: 163）。重要なことに、彼女が地理学の視点から述べるには、「ニュージーランドの文脈では、農業における生産主義とポスト生産主義の形態は、同じ社会・農業空間の内で共存する」（Jay, 2003: 163）。さらに彼女は、単に農業の変化よりもむしろ農村社会の変化が移行を推進すると考察した。そして、「ハードな」環境変化（たとえば汚染された水）と「ソフトな」ダメージ（価値付けられた景観、象徴的なアイコン、先住民の権利）とのバランスについて評価する中で提起するには、後者が「地域的、全国的に最も顕著であり、このことは生産主義のパラダイムからポスト生産主義のパラダイムへ向かう変化の、最も重大な広まりを示している」（Jay, 2003: 165）。

Wilsonもニュージーランドにおいて固有林の文脈で生産主義とPPTの研究に着手しており、それは彼が「理想的な事例研究」と呼ぶものであった（Wilson and Memon, 2005: 1495）。ここで彼らは「ヨーロッパ中心の論争」を乗り越えようと企て、生産主義とポスト生産主義に対するHolmes（2002）とArgent（2002）の応答に依拠して研究を進めた（Wilson and Memon, 2005: 1495）。彼らの分析は、農牧地と森林が「生産主義とポスト生産主義の精神空間と物理空間への分離」をともなうことを明らかにした（Wilson and Memon, 2005: 1497）。Wilson and Memon（2005: 1511）が結論部で強く主張するには、「ニュージーランドにおける農地と固有林の接触域が例証する点は、ヨーロッパの農業景観や森林景観の歴史的発展にもとづいたヨーロッパの概念を、新世界の状況に直接移転することには問題があるという点である」。このことから、彼らは「レジーム」よりも「占有」というHolmes（2002）の命名法に同意し、「ニュージーランドの文脈ではポスト生産主義の主要な指標として、土地利用、土地所有権、土地管理の問題」（Wilson and Memon, 2005: 1511）が相対的に重要であると指摘した。そして、彼らの研究はPPTの単線性と二元性に対するArgent（2002）の批判を補強し、他方で、ニュージーランドは多面的機能の空間内における生産主義とポスト生産主義の空間の領域化という、Wilsonの初期の見解を補強すると考えた。

ニュージーランドの酪農協同組合Fonterraの事例研究は、新しい用語であるネオ生産主義への入り口である（Burton and Wilson, 2012）。包括的な用語であるネオ生産主義は、それを４つの類型に区別した類型一覧の一部に、競争的生産主義とスーパー生産主

義を含んでいる。しかし興味深いことに、その中にハイパー生産主義は組み入れられていない（Burton and Wilson, 2012: 58）。有用なことに、それが提起する問題は、「協同的生産主義」を例証する組織としてFonterraに焦点を当てることが、議論の対象を景観における生産主義から、根底にある生産主義的過程へと精妙に移行するかどうかというものである。

ごく最近、Rosin（2013）は政治生態学の視点からニュージーランドの牧畜部門を分析する中で、生産主義の農業という用語を使用するとともに、新しい用語である「生産主義イデオロギー」を再導入した。イデオロギーは生産主義とポスト生産主義の初期の評価に含まれていたが（たとえばWilson, 2001; Burton and Wilson, 2006）、オーストラリアとニュージーランドではほとんど注目を集めなかった。Rosin（2013: 54）は過去1世紀のニュージーランドの牧畜業を考察しながら、いかにその商品の実質的にすべてがイギリス市場で消費されたか、このことが一方で「土地と労働者の搾取」の問題を霞ませながら、いかに牧畜農場主に「報酬とステータス」を与えたかを指摘した。彼が論じるには、この生産主義イデオロギーは、1973年のイギリスのEU加盟と、1980年代における農業補助金の突然の撤廃によって、1980年代半ばに破綻しはじめた。こうしたことが「繁栄した牧畜社会というユートピア的な空想」を終焉させたように見えたが、しかしそれは後に活力を取り戻したという。このイデオロギーはその新しい形態において、補助金のない農業を自画自賛するものであっただけでなく、Rosin（2013: 54）が「世界を養う」と要約した新しいユートピア的な理想をも含んでおり、そこには1973年以前の数量から、効率への移行があった。この後者の再定位は、幅広い新自由主義イデオロギーに組み入れられた。それが意味することは、グローバルな食料安全保障の問題が高まる時代に「世界を養うという道徳的な正当化」を行う生産主義イデオロギーは、国の温室効果ガス排出量の大きな要因である家畜が出すメタンを対象とした、地球温暖化を食い止めるETSアプローチに反発し拒否するために用いられてきたということであった（Rosin, 2013: 57）。この言説の頑強さは特に顕著であり、気候変動という形態の環境問題を調停するという点において、この言説はそのまま、「世界を養うというユートピア的な責務」や、業界の通常の状態の「道徳的な正当化」と結びついているのである（Rosin, 2013: 57）。

Ⅳ　議論

振り返ってみると、西欧工業国におけるポスト1970年代の農業政策・慣行の移行を記述するとともに説明する、生産主義やポスト生産主義、多面的機能という用語は、その有益さや無益さをめぐる比較的短期間の論争が、農村地理学を多数の点で進展させてきた。この議論に貢献した研究について、本流から分岐したものであったとしてもレビューしてわかることは、農業の多次元的な再構成と、その農村（と都市）社会・経済との幅広い関係をめぐって、多くの研究成果が現れてきたことである。すなわち、農場（と景観）スケールでの変化を進める推力の複雑性について、ますます敏感になった研究成果である。PPTの考えは、ともすれば白熱したいくつかの短い論争だけであっても、さまざまな政治的、歴史地理的、農環境的な背景を有する、農村・農業地理学者と関連する社会科学者とを引き合わせた。そこで多くの者は、グローバル化する食料・繊維の商品連鎖や民・官による政策立案の関連分野といった、幅広く概念的によりニュアンスのあるアプローチの内で、伝統的な研究焦点を検討することを選んだ。それはフードレジームや反都市化の文献のようなより確立された分野の洞察を利用したため、もちろんその論争も、過去、現在、ありうる将来の農業・農村のダイナミクスに関する、学際的で潜在的により強力かつ揺るぎない分析に貢献した。そうした論争によってこのサブディシプリンは、時折自らを方向づけた「農村－都市連続体」の知的な袋小路から一時的に脱したと言えるかもしれない。今日では世界の人口の大部分は町や都市に暮らしているが、ローカル、ナショナル、グローバルな食料や天然資源のガバナンスとポリティクスにおいて、決定的に重要な現代の問題と関心が根をおろすのは「農村的なこと」である、という点がいよいよ認識されてきた。誰が「農場にいる」か、いかに農場が経営されているか、土地、天然資源、農家、ローカルな経済に何の効果があるか、といった点は今や大部分の人口にとってますます問題である。筆者らの主張は、こうした帰結においてPPTや多面的機能の議論が小さくない役割を果たしたこと、対蹠地（や対蹠地の地理学者と他の社会学者）はこの議論の重要なプレイヤーであったことである。

しかしながら前述の要約で明示したように、生産主義やポスト生産主義は、インターナショナル、ナショナルスケールでの政策や制度の変化に関する説明としてかなり魅力があるものの、（当然ながら）

リージョナル、ローカルスケールにおける無数の反応を説明し損ねたことで、後に放棄されることになった。現代の農業・環境・農村変化は空間を横断してあちこちで展開し続けているが、今の問題は、その複雑な現実に対する理解やおそらく学問的な介入にとって、PPTやその後に来るものが妥当性を持つかどうかである。筆者らは、こうした観念には依然としていくらか利点があるが、しかしそれは観念の利用にまつわる概念と用語法の明快さを発展させうる場合においてのみであると主張する。本研究の残りの部分では、現代の農業変化のマルチスケールな全体性にアプローチする、まさにそうした発見的フレームワークを開発しようと試みるが、その際に、まず間違いなく今もなお生産主義的である、オーストラリアとニュージーランドの農場・農村部門へ主に焦点を合わせる。筆者らは２つの側面に重点的に取り組む。すなわち、PPTや多面的機能の田園地域に関する文献の顕著な特徴に依拠した、農業・農村変化の真にマルチスケールな評価を発展させること、上述したように主要な用語を明確化することである。

筆者らの最初の意見は、生産主義やポスト生産主義、PPTの相対的な強みと弱みは、スケールの概念と根本的に関係するというものである。PPTの強みの一つは、ナショナルな農業に明確な焦点を置くことを可能にし、そして農場補助金への反対や生態学的により持続可能な農場経営の支持といった超国家的な運動の（統一性は決してないが）高まりを受けて、ナショナルな農業の内で進行する再編過程をはっきり見定めることを可能にした点である。農業の政治経済学の文献はこの領域の研究を切り開き、農業資材企業や会社型スーパーマーケットチェーンのグローバル化によって農場主世帯の抑圧と周縁化が増すことを強調したが（Whatmore et al., 1987）、一方でPPTの研究は、農業・農村変化に対する微妙に異なる（しかし依然として大部分は構造主義的な）見方を与え、農村地域に現れる「新しい様相」と価値、農村空間の再解釈がもたらした経済機会を強調した。（対蹠地などの）研究者にとってPPTの魅力の一部は、ある政治的調整と農業の文脈から別のそうした文脈への潜在的な移植可能性にある。

PPTの妥当性をめぐる議論や論争の先導的な支持者であるWilsonとHolmesは、ここで主導権を握った。Wilson（2009, 2010）は、地理的諸スケールにおいて、かつそれらを貫いて、農業の多面的機能の規範的な側面を精密に記した。Wilson（2010）は「諸資本」のフレームワークに依拠し、「強い」多面的機能は規範的な理念であると主張した。なぜならそれは、各資本（人的資本、社会関係資本、環境資本、経済資本）の最適値を提示して、農村コミュニティと地域に、ますます圧縮された時間・空間の中でレジリエンスと頑健性のストックを発展させる最高の機会を与えるからである。彼が示す入れ子状のヒエラルキーのスキーマは、その核に対をなす規範的な主張がある。すなわち、「長期的には、農業システムの経済効率と存続は、強い多面的機能の道筋の発展や維持に基づくかもしれない」という主張と、「多面的機能は・・・人間の意思決定と、現場におけるそうした決定の空間的な表出とのつながりに関するものであるに違いない」という主張である（Wilson, 2007: 257, 原著者による強調）。この分野におけるWilsonの研究のリーダーシップは、（Rob Burtonとの共同による）社会心理学の利用にまで拡大し、それによってイギリスのベッドフォードシャーにおける農場主の自己アイデンティティを調査し、ローカルな農場主が生産主義、ポスト生産主義、多面的機能の農業類型にどの程度適合するかを調べた（Burton and Wilson, 2006）。

Holmes（2006）がまったく異なるアプローチの中で焦点を当てるのは、「実際に存在する」多面的機能の景観を探求する一組のメソスケールの概念を開発することである。Holmesは彼が言うところの三つ組みの推力（生産・保護・消費）を通して、７つの「占有様式」とそれらの主要な経路を認めた。多面的機能主義のようなメソスケールの概念の運用を企てることは、さまざまな理由で重要であり的を得ている。オーストラリアでの継続する急激で顕著な人口増加と大規模な移民流入、非大都市の定住システムと都市のヒエラルキーの再構成という背景において、さまざまな地域や町の予想される将来の人口、経済、社会、環境の健全性を評価するために、農村空間の多様な地域区分に関する洗練された理解は決定的に重要である（McGuirk and Argent, 2011）。同様に、ローカルレベルや地域の新自由主義的な開発政策の決定が蔓延していることを考慮すると、ローカルスケールでの過去、現在、ありうる将来の、土地利用パターン、経済開発の選択肢、サービス提供へのニーズに関する詳細な理解は、農村コミュニティにとっても資金提供機関や政策機関にとっても決定的に重要である。ただし全体的に見ると、また（上述の）成し遂げられた革新的な概念研究にもかかわらず、はっきりとこの研究プログラムにのっとって研究を進めようとした者は、たとえ存在したとしても比較的少数である。

農村の移行を探求する上で有望と思われる方途は、進化経済地理学（EEG）である。近年、Tonts et al.（2012: 292）は、オーストラリア農村の変化の性質を評価する中で、失われている要素の探索に焦点を当てる。それは、「変化と継続を支えるメカニズムの明確な理解」である。この点において、彼らの目的はより状況論的なアプローチを開発することにあり、すなわちそのアプローチとは、オーストラリア農村という背景の特殊性が、幅広い理論的な論争に影響を与え、潜在的に「農村経済の転換に関する幅広い理論に『ストレステスト』を提供」しうるものである（Tonts et al., 2012: 300）。EEGの観点から見ると、特定のレジーム（例えば生産主義）の長期的な維持は、経路依存の一形態として容易に理解されるかもしれない。つまり、国家の政策立案者、リージョナルスケールやローカルスケールの農場アドバイザー、農場主自身は、集約的で対費用効果が高い農業生産と商取引という「構造化された一貫性」に、認識的に「とらわれている」というようにして。たいてい経済地理学者にとって経路依存は、そもそも時間的過程であるだけでなく空間的過程でもあり、それゆえ経路依存は場所依存の一形態とみなされる傾向がある。同様に、EEGのフレームの内では、生産主義から離れる地域スケールの変化のようなレジームの移行は（その過程は地域の地主間で偏りがあるかもしれないが）、いかに経路（と場所）依存が時折破断するかを示す例として解釈されるかもしれない。Tonts et al.（2014）は、農村経済全体のレジームの移行を促す「衝撃」について、そのマルチスケールな起源と（たとえば雇用や所得の点での）非常にローカル化された影響を識別するのを助けるために、どのように量的手法が採用されうるかを明示した。加えて、Wilson（2010）が関心を抱く地域「レジリエンス」という重要な概念も、地域分析に向けたEEGのアプローチにおいて中心的な役割を果たしている。

さまざまな農業レジームの移ろう影響に関して、地理的諸スケールを貫いて明らかにするもう一つの補完的な方途は、Marsden（2010）の生態経済と「農村のウェブ」という対の考えにある。この生態経済は多面的機能の文献に深く影響を受けて、その分析を農場という非常にローカル化されたスケールに向ける。そして、食品や繊維製品の創造とそれらから派生した「存続可能な事業と経済活動の複雑なネットワークやウェブ」における、「第二の自然」（継承された生態資源）の役割を強調する（Marsden, 2010: 226）。生態経済は明白に規範的な観念であり、近代的なフードファイバーシステム内の生産と消費における、真の社会的、経済的、環境的な持続可能性の達成に関心を寄せるものである。Marsden（2010: 229）にとって、「農村のウェブ」（農村と都市、生産者と消費者を結合させる「多次元的で、確かに多面的機能を有する媒体」）の発展は、生態経済の達成に不可欠である。６つの「領域」が「農村のウェブ」の中心をなし、それらの多くはEEGの思想と強く共鳴する。この６つとはすなわち、内生性（ローカルな文脈への埋め込みと類似のもの）、目新しさ、社会関係資本、市場ガバナンス、新しい制度的取り決め、持続可能性である。生態経済の関心は、ローカルな生態と超ローカルなガバナンスシステムに埋め込まれた、企業と消費者とのローカル、地域的な相互結合を詳説することにあり、この生態経済の関心とEEGのより総覧的な観点との注意深い組み合わせは、農村・農業変化のマルチスケールな過程を図示する強力な手段を提供すると言えるだろう。

ポスト生産主義に対する初期の批判は、農村変化の軌跡について過度に単線的な解釈を示唆するその用語法に集中した。対蹠地の経験によると、生産主義の後に来る形態は、地域によってはPPTを経由した多面的機能ではなく、むしろ農業を集約化する「競争的生産主義」であり、これは評者らが想定したであろうよりもオルタナティブな農業の言説に対して耐久性があるものかもしれないし、またそうした言説が多面的機能主義に反することを可能にするものである。これに追加されるであろう新しい類型のいくつかには、「ハイパー生産主義」（Dibden et al., 2009; Wilson, 2010）、Wilson（2010）とWoods（2012）が用いてきた「スーパー生産主義」、ごく最近のネオ生産主義（Burton and Wilson, 2012）がある。最初のPPTの概念は、政治経済学が農業・農村地理学で主導的な地位にある時期に現れた。今では状況が異なることは、オーストラリアにおける進化農村地理学への関心（Tonts et al., 2012）や、ニュージーランドにおけるポスト構造主義的な政治経済学の探求（Le Heron, 2007）に例証される。またこのことが気づかせる点は、オーストラリアとニュージーランドはグローバルノースの単純な拡張部分として、そこに概念をよどみなく移動できたり、わずかに異なる新たな経験的現実の中で単に諸観念をテストすることができたりする場所ではないという点である。Mather et al.,（2006）が議論した問題の再発を避け、かつ上述したスケールに敏感なフレームワークの開発と両立するために、競争的生産主義、ハイパー生産主義、スーパー生産主義について、いくらか用語法の明確化が必要である。

Holmes（2006）は、多面的機能主義と逆のものとして単一機能主義に言及した。彼はこの用語の起源を、ニュージーランドの地理学者Richard Le Heronとの個人的なコミュニケーションで確認し、Le HeronがHolmes（2006）の草稿を読んでその言い回しを作ったと認めた。この用語は後にWilson（2010: 365）の文献に登場し、そこでは、多面的機能の空間に想定された均質性を打ち破る議論の文脈の中に、この用語が対比的要素として現れる。Le Heronのもとの論評は、「20世紀半ばにおける私たちの特有の見方は、ほぼ単一機能の経験である」という趣旨のものであった（Le Heron in Holmes, 2006: 145）。これはさらに検討するに値する。

第１に、言及された20世紀半ばの単一機能の景観は、生産主義の特性を有する。『グローバル化した農業』におけるLe Heron（1993）の対象範囲は、ニュージーランド、オーストラリア、アメリカを含み、彼はフードレジームの概念を利用した。第２に、言外の含みでは、単一機能主義は多面的機能主義に先行する。第３に、生産主義の土地利用と保護主義の土地利用との領域的分離がいくらかあった地域において、単一機能主義は理解しやすい。Wilson and Memon（2005）は単一機能―多面的機能という用語法を引き合いに出していないものの、ニュージーランドの林業と農業の接触域における土地所有権の取り決めの重要性を強調している。一方、Primdhal and Swaffield（2004）は、植民国家が特定の、しばしば単一目的の土地利用を指定するという事態が、王領地の公示、再割当、再分配によっていかに生み出されたかを認めている。このことは国立公園と入植地の境界画定に見出しうるが、それらは混在し有機的に境界づけられた領域というよりも、分離し隣接するしばしば直線で囲われた地区である。これは、イギリスに存在する土地利用パターンの複雑なモザイクとは対照的であり、このモザイクは幾世紀にもわたる占有によって形成されたものである。第４に、土地利用としての単一機能はその働いている過程を浮き彫りにしない。明らかに大きな分析的スケールでは、単一機能の土地利用から多面的機能の土地利用に向かう20世紀後半の移行が、少なくともニュージーランドの、農村における土地利用の変化の諸相を表している。第５に、観察可能な土地利用のパターンから内在する過程へ回帰するにつれて、生産主義やポスト生産主義の全体の論争がもたらした問題の一つは、生産主義やポスト生産主義の原動力の存在を推論するために景観の外見が用いられる点にあった。Le Heron（1988: 410）は、「単一機能の農業やルーラリティを際立たせる資本主義的過程を同定する際に、景観変化の背後にある『社会構造とメカニズム』に関してより多くの議論を求める立場」について論じた。

おそらく現代の出発点は「競争的生産主義」（Dibden et al., 2009）である。この用語は、イギリスの農村における生産主義の土地利用を今もなお支え方向づける補助金や規制の度合いと対比させて、オーストラリアの（またニュージーランドにも当てはまりそうな）生産主義の現在の形態を記述するために用いられている。一つの課題は、どのような形容詞がイギリスの現代の農村・農業の生産主義にとって適切かを判断することである。これについては、Dibden et al.（2009）にもとづいて「保護主義的生産主義」が推定されうるものの、ローカルな事情に馴染みのある者が最良の答えを出すかもしれない。しかし離れた場所から、現在のイギリスで「競争的生産主義」に相当するものと、スーパー生産主義というより集約的な形態とを区別することも必要であるように思われる。

Halfacree（2006: 56-7）は、イギリスのスーパー生産主義を、ポスト生産主義の空間の一形態とみなしている。それは「生産の空間性を再び表明するものであるが、今回ははるかに抑制されない形態をとっており、その道徳的な側面が剥ぎ取られている。抽象空間という資本主義の『論理』が、完全に解き放たれているのである」。彼はその証左を、植物の遺伝子組換えやより一般的に言うとバイオテクノロジーという点での、アグリビジネスの拡大に見出す。しかしながら、Halfacreeは議論をイギリスの事例の特殊性に合わせる一方で、理論的な観念をより一般的に適用することの重要性を強調する。オルタネティブフードプロダクションネットワークとともに、消費やアメニティの景観に集まっている多数の注目と釣り合いをとるものとして、スーパー生産主義に注意を払う必要がある。たとえその理由が、スーパー生産主義が有する、食料生産全体にとっての主張された重要性と実質的な重要性だけであったとしても。Burton and Wilson（2012）は有益性のある、部分的な類型論を提供している。そこで彼らは、ニュージーランドの協同的生産主義がイギリスに適用できるかどうか疑問を呈しているが、しかし彼らのより重要な論点は、グローバルなフードシステムの危機が多面的機能主義に圧力をかけるという点にあるかもしれない。さらなる実証研究が、Burton and Wilsonの類型論の頑強さを「証明」するだろう。こうした考察は、生産主義の新たな研究と解明を促すという筆者らの関心をさらに強めている。

V　結論

対蹠地の農村地理学者の間で、生産主義はポスト生産主義よりも幅広く長期的に受け入れられてきた。それらの概念が2000年代初頭に論争された時には、このことは特に明白ではなかった。実際に生産主義は、競争的生産主義、ハイパー生産主義、スーパー生産主義といった形で、いくらかの新しい側面によって用語に変更が加えられてきた。それらの生産主義はすべて、分析や実証の面でさらなる注目に値するものである。また、それらは単線的な意味で、農村の多面的機能占有であるのと同じくらい、生産主義のポスト移行の形態であるという主張は、今では究明を要する。最後に、単一機能と多面的機能を並置することは、多面的機能の性質に関する継続中の概念化をさらに再活性化する手立てにもなるだろう。特に景観と関連する場合はそうである。古い形態と新興の形態の生産主義が置かれる文脈も、2000年から変化して、今や農村変化だけでなく新自由主義やガバナンスに関するものになっている。

ますます多くの研究者が、生産主義／ポスト生産主義の二分法の構造に不快感を覚え、多面的機能に飛びついた。多面的機能がそうした二項対立の観念を矯正する手段として強調したのは、生産・消費・保護の推力は共存しうるし実際にそうであった事実や、その農村空間の全体的な軌跡を指揮する各推力の相関的な強さについてである（Holmes, 2006）。ただし、もしこのことが現在の「生産主義後」の時代に当てはまるのならば、確実にそれは1970年代以前の、少なくともオーストラリアとニュージーランドのほとんどで、世帯経営が大部分を占めた混合農業の卓越していた時期に当てはまる。言い換えると、多面的機能について、農業・農村景観のある程度どこにでもある特性と考えるべきではなく、「３つの推力」に大なり小なりの影響力を付与するものと考えるべきであろうか？　もしそのことが受け入れられるならば、生産主義やスーパー、ハイパー生産主義のような用語は、多面的機能の「広々とした器」に収められうるが、しかしそれによって、おそらく消費と保護は相対的に犠牲になるだろう（たとえばアメニティの利用や環境の健全性はおろそかにされるかもしれない）。ここまでオーストラリアとニュージーランドの生産主義を再検討してきて最後に強調したいことは、生産主義は現在、農村地理学の文献に存在するゆえに、またとりわけ2010年代の生産主義は1990年代後半の生産主義ではないゆえに、その概念のさらなる進歩と解明に適した時期が到来しているということである。

謝辞

本研究はMichael Rocheが2013年に、ニューサウスウェールズ州アーミデールのニューイングランド大学大学院行動・認知・社会科学研究科において客員研究員の地位を与えられて実現した。

訳注

1)　本文の‘agricultural’は、原文のHolmes（2002: 381）では‘rural’であり、引用の誤りである。

参考文献

Argent N (2002) From pillar to post? In search of the post-productivist countryside in Australia. *Australian Geographer* 33: 97-114.

Argent N (2011) Trouble in paradise? Governing Australia's multifunctional rural landscapes. *Australian Geographer* 42: 183-206.

Barr N (2005) *The Changing Social Landscape of Rural Victoria.* Melbourne: Department of Primary Industries.

Burton R and Wilson G (2006) Injecting social psychology theory into conceptualisations of agricultural agency: Towards a post-productivist farmer self-identity? *Journal of Rural Studies* 22: 95-115.

Burton R and Wilson G (2012) The rejuvenation of productivist agriculture: The case for 'cooperative neo-productivism'. In: Almas R and Campbell H (eds) *Rethinking Agricultural Policy: Food Security, Climate Change and the Future Resilience of Global Agriculture.* London: Emerald, 51-72.

Chalmers L, Joseph A and Smithers J (2009) Seeing farmers' markets: Theoretical and media exchanges on the new sites of exchange in New Zealand. *Geographical Research* 47: 320-330.

Cocklin C, Dibden J and Mautner N (2006) From market to multifunctionality? Land stewardship in Australia. *Geographical Journal* 172: 197-205.

Conradson D and Pawson E (2009) New cultural economies of marginality: Revisiting the west coast, South Island, New Zealand. *Journal of Rural Studies* 25: 77-86.

Denoon D (1983) *Settler Capitalism: The Dynamics of Dependent Development in the Southern Hemisphere.* Oxford: Clarendon Press.

Dibden J, Potter C and Cocklin C (2009) Contesting the neoliberal project for agriculture: Productivist and multifunctional trajectories in the European Union and Australia. *Journal of Rural Studies* 25: 299-308.

Evans N and Morris C (1997) Towards a geography of agri-environ-

mental policies in England and Wales. *Geoforum* 28: 189-204.

Fielke S and Bardsley D (2013) South Australian farmers markets: Tools for enhancing the multifunctionality of Australian agriculture. *GeoJournal* 78: 759-776.

Halfacree K (2006) Rural space: Constructing a three-fold architecture. In: Cloke P, Marsden T and Mooney P (eds) *Handbook of Rural Studies.* London: SAGE, 44-62.

Harvey D (1984) On the history and present condition of geography: An historical materialist manifesto. *The Professional Geographer* 36: 1-11.

Holmes J (2002) Diversity and change in Australia's rangelands: A post-productivist transition with a difference? *Transactions of the Institute of British Geographers NS* 27: 362-384.

Holmes J (2006) Impulses towards a multifunctional transition in rural Australia: Gaps in the research agenda. *Journal of Rural Studies* 22: 142-160.

Holmes J (2008) Impulses towards a multifunctional transition in rural Australia: Interpreting regional dynamics in landscapes, lifestyles and livelihoods. *Landscape Research* 33: 211-223.

Holmes J (2010a) Divergent regional trajectories in Australia's tropical savannas: Indicators of a multifunctional rural transition. *Geographical Research* 48: 342-358.

Holmes J (2010b) The multifunctional transition in Australia's tropical savannas: The emergence of consumption, protection, and indigenous values. *Geographical Research* 48: 265-280.

Holmes J (2012) Cape York Peninsula, Australia: A frontier region undergoing a multifunctional transition with indigenous engagement. *Journal of Rural Studies* 28: 252-265.

Ilbery B and Bowler I (1998) From agricultural productivism to post-productivism. In: Ilbery B (ed.) *The Geography of Rural Change.* Harlow: Addison Wesley Longman, 57-84.

Jay M (2003) Productivist and post-productivist conceptualisations of agriculture from a New Zealand perspective. In: Kearsley G and Fitzharris B. (eds) *Glimpses of a Gaian World: Essays in Honour of Peter Holland.* Dunedin: School of Social Science University of Otago, 151-170.

Jay M (2005) Remnants of the Waikato: Native forest survival in a production landscape. *New Zealand Geographer* 61: 14-28.

Jay M (2007) The political economy of a productivist agriculture: New Zealand dairy discourses. *Food Policy* 32: 266-279.

Johnsen S (2004) The redefinition of family farming: Agricultural restructuring and farm adjustment in Waihemo, New Zealand. *Journal of Rural Studies* 20: 419-432.

Joseph A, Lidgard J and Bedford R (2001) Dealing with ambiguity: On the interdependence of change in agricultural and rural communities. *New Zealand Geographer* 57: 16-26.

Lawrence G, Richards C and Lyons K (2013) Food security in Australia in an era of neoliberalism, productivism and climate change. *Journal of Rural Studies* 29: 30-39.

Le Heron R (1988) Food and fibre production under capitalism. *Progress in Human Geography* 12(3): 409-430.

Le Heron R (1993) *Globalized Agriculture: Political Choice.* Oxford: Pergamon Press.

Le Heron R (2007) Globalisation, governance and poststructural political economy: Perspectives from Australasia. *Asia Pacific Viewpoint* 48: 26-46.

McDonagh J (2013) Rural geography I: Changing expectations and contradictions in the rural. *Progress in Human Geography* 37(5): 712-720.

McGuirk P and Argent N (2011) Population growth and change: Implications for Australia's cities and regions, *Geographical Research* 49: 317-335.

Marsden T (2010) Mobilizing the regional eco-economy: Evolving webs of agri-food and rural development in the UK. *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society* 3: 225-244.

Mather A, Hill G and Nijnik M (2006) Post-productivism and rural land use: Cul de sac or challenge for theorization? *Journal of Rural Studies* 22: 441-455.

Panelli R, Stolte O and Bedford R (2003) The revinvention of Tirau: Landscape as a record of changing economy and society and culture. *Sociologia Ruralis* 43: 379-400.

Potter C (1997) Environmental change and farm restructuring in Britain: The impact of the farm family life cycle. In: Ilbery B, Chiotti Q and Rickard T (eds) *Agricultural Restructuring and Sustainability: A Geographical Perspective,* Wallingford: CAB International, 73-86.

Primdahl J and Swaffield S (2004) Segmentation and multifunctionality in New Zealand landscapes. In: Brouwer F (ed.) *Sustaining Agricultural and Rural Environment, Governance, Policy and Multifunctionality.* Cheltenham: Edward Elgar, 266-285.

Roche M (2005) Rural geography: A borderland revisited. *Progress in Human Geography* 29(3): 299-303.

Rosin C (2013) Food security and the justification of productivism in New Zealand. *Journal of Rural Studies* 29: 50-58.

Shucksmith M (1993) Farm household behaviour and the transition to post-productivism. *Journal of Agricultural Economics* 44: 466-478.

Smailes P (2002) From rural dilution to multifunctional countryside: Some pointers to the future from South Australia. *Australian Geographer* 33: 79-95.

Smith W and Montgomery H (2003) Revolution or evolution? New Zealand agriculture since 1984. *GeoJournal* 59: 107-118.

Smith W, Montgomery H and Rhodes T (2007) North Island hill country farmer's management response to issues of sustainability. *New Zealand Geographer* 63: 30-42.

Tonts M, Argent N and Plummer P (2012) Evolutionary perspectives on rural Australia. *Geographical Research* 50: 291-303.

Tonts M, Plummer P and Argent N (2014) Path dependence, resilience and the evolution of new rural economies: Perspectives from rural Western Australia. *Journal of Rural Studies* 36: 362-375.

Ward N (1993) The agricultural treadmill and the rural environment in the post-productivist era. *Sociologia Ruralis* 33: 348-364.

Whatmore S, Munton R, Little J and Marsden T (1987) Towards a

typology of farm businesses in contemporary British agriculture. *Sociologia Ruralis* 27: 21-37.

Willis R (2001) Farming. *Asia Pacific Viewpoint* 42(1): 55-65.

Willis R (2003) Rural decline and change in post restructuring New Zealand: Both evolution and revolution. In: Beesley K, Milward H, Ilberry B and Harrington L (eds) *The New Countryside: Geographic Perspectives on Rural Change.* Halifax, NS: Brandon University (Rural Development Institute) and StMary's University, 64-77.

Wilson G (2001) From productivism to post-productivism . . . and back again? Exploring the (un)changed natural and mental landscapes of European agriculture. *Transactions of the Institute of British Geographers NS* 26: 77-102.

Wilson G (2004) The Australian Landcare movement: Towards 'post-productivist' rural governance. *Journal of Rural Studies* 20: 461-484.

Wilson G (2007) *Multifunctional Agriculture: A Transition Theory Perspective.* Wallingford: CABI.

Wilson G (2008) From 'weak' to 'strong' multifunctionality: Conceptualising farm-level multifunctional transitional pathways. *Journal of Rural Studies* 24: 367-383.

Wilson G (2009) The spatiality of multifunctional agriculture: A human geography perspective. *Geoforum* 40: 269-280.

Wilson G (2010) Multifunctionality 'quality' and rural community reliance. *Transactions of the Institute of British Geographers NS* 35: 364-381.

Wilson G and Memon P (2005) Indigenous forest management in 21st-century New Zealand: Towards a 'postproductivist' indigenous forest-farmland interface? *Environment and Planning* A 37: 1493-1517.

Wilson G and Rigg J (2003) 'Post-productivist' agricultural regimes and the South: Discordant concepts? *Progress in Human Geography* 27(6): 681-707.

Woods M (2009) Rural geography: Blurring boundaries and making connections. *Progress in Human Geography* 33(6): 849-858.

Woods M (2010) Performing rurality and practising rural geography. *Progress in Human Geography* 34(6): 835-846.

Woods M (2011) *Rural.* London: Routledge.

Woods M (2012) Rural geography III: Rural futures and the future of rural geography. *Progress in Human Geography* 36(1): 125-134.